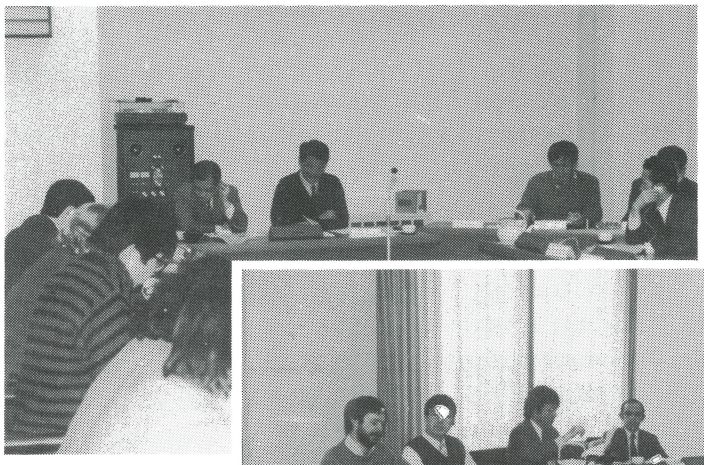
ISSN 0288－1594

AV JOURNAL

1989年3月 第16号



〈デシジョンルームにて〉

目　次

〝異文化間コミュニケーションと外国語学習〟
外国人教師による座談会(第5回)……2
私説「視覚映像文化論」その4……ポルトガル・ブラジル語学科　林田　雅至…15
映像資料(レーザー・ディスク)所蔵一覧……19
編集後記……20

大阪外国語大学

"異文化間コミュニケーションと外国語学習"

外国人教師による座談会 第5回

(1989年2月2日)

出席者

趙　金銘（中国語通訳つき）	（中国語）
金　静子	（朝鮮語）
アイプ　ロシディ	（インドネシア語）
ユー，ロザリオ	（フィリピン語）
タバッスム，カシミーリー・ムハンマド・サールヒーン	（ウルドゥー語）
マーラヴィーア，ラクスミ・ダル	（ヒンディー語）
アニマ　ジュマ　カシニャ	（スワヒリ語）
ラジャブザーデ，ハーシェム	（ペルシャ語）
スターク，イアン・クリストファー	（イギリス）（英　語）
ネルソン，ウイリアム・ロバート	（アメリカ）（英　語）
パルダン・ミュラー，マーティン	（デンマーク語）
シルバ，バアモンデ・エルナン	（イスパニア語）
プロトニコヴァ，ガリーナ・ニコラーエヴナ（ロシア語通訳つき）	（ロシア語）

中国語通訳

上　神　忠　彦	（中国語）

ロシア語通訳

神　山　孝　夫	（ロシア語）

同時通訳指導

上　野　義　和	（英　語）

同時通訳者（本学学生）

稲　垣　俊　史	（英語学科3年）
柏　原　恭　子	（英語学科3年）
野　田　　綾	（英語学科3年）
北　村　元　哉	（英語学科3年）
橋　本　誠一郎	（英語学科3年）

視聴覚教育委員会委員長

溝　上　富　夫

視聴覚教育委員会小委員

橋　本　　勝
友　田　舜　三
角　道　正　佳
大　木　　充

《基調報告》
異文化接触に対して開かれた外国語学習

ドイツ語学科　友　田　舜　三

1

ここ数十年間の世界の変化は凄まじく、地球上の往来が驚異的に増し、私達の存在基盤そのものが、国際的な経済交流や文化交流をぬきにしては語れないような時代になりつつあります。しかも最近の文化交流は、質的にみてさらに新しい局面を迎えています。つまり従来のように政府や大企業が行う国家間レベルでの文化交流ではなく、個々の一般市民が具体的に外国人と出会い、身をもって体験する異文化と接触が、あらたな経験や問題意識を生みだし始めたのです。それにともなって、外国語の能力もテクスト読解中心ではなく、対面コミュニケーションに重点が移ってきました。

ところが一方で、日本で行われている外国語授業を観察してみますと、毎日毎日全国津々浦々の学校や大学で、膨大な時間とエネルギーを費やして、英語やドイツ語などが教えられているのですが、その中身は一昔前と全く変わらず、文法事項の説明と日本語への翻訳に終始している場合が多く見られます。これでは、外国語の学習というより、外国語についての日本語による講義ともいうべきであって、もはや、その言語が話されている国の生活や文化活動とは、何らリアルな関係を持たなくなっています。それは、まさに、「日本人の、日本人による、日本人のための外国語」と呼ぶにふさわしいものであります。勿論、翻訳による外国文化、特に西欧文化の輸入

が、日本の近代化にとって果たした役割は計り知れないものがありますし、翻訳は、それ自体高い能力を必要とする言語活動です。しかしながら現代のように、他国との積極的なコミュニケーションが重要な時代には、外国語授業も、外国人との直接的接触に対処できる能力を伸ばすことができるような学習活動に改革していく必要があると思われます。その際、重要なキーワードは、最近よく論議される「異文化接触」とか「異文化コミュニケーション」の視点であると、私は考えます。

2

私達の大阪外大にも毎年何人かの客員教授の方々が新しく来られますが、この方たちの学生に対する第一印象は、礼儀作法については良くとも、授業活動に関しては、必ずしもポジティブではありません。特に不満の声をきくのは、学生の姿勢がややもすると受け身で沈黙の時間が多いという点と、将来設計に関してあまり考えておらず、従って、モティベーションがあまりない、という点です。この点に関しは、是非後で、ここに来られている先生がたのご意見も伺いたいと思います。私自身もドイツ語の教師として、外国語教授法に興味を持ち、様々なセミナーによく参加するのですが、そこで出会う日本に来たばかりのドイツ人講師からは、くりかえし、同じような体験を聞かされます。「初めてクラスに入っていくと、学生たちは、じろじろ私を眺めたり、恥ずかしがったりして、なかなか口を開いてくれず、心が傷つけられた。」とか、「つまらないことで誤解が生じても、誰も訂正してくれなかったので、長い時間を無駄にし、腹がたった。」などの体験談は、決して、極端なケースではないようです。このような葛藤的シチュエーションこそは、「異文化接触」の場であり、それを上手に切り抜けることをこそ、学生達は学ばなくてはならないのですが、当の無邪気な学生たちは、外国人教師を絶望に陥れたとも知れず、ケロッとして「異人」との遭遇を楽しげに友人に語って聞かせるのですから、これはもう、悲喜劇の世界です。

3

さて、ここで問題になっていることは、単に文法の知識が足りないとか、語彙が不足しているとかの、知識としての外国語の能力ではなく、あるシチュエーションの中で相手の意図を理解し、自分の思うところを伝える能力、つまりコミュニケーション能力の有無です。「外国人とのコミュニケーション」という本で知られる上智大学のネウストプニー氏は、日本人は、「英語の能力がないから英語が話せない」のではなく、「コミュニケーションができないから英語が話せないのだ」という名せりふをはきましたが、この言葉は一見逆説めいてはいるけれども、多くの、学習者たちのディレンマをみごとに言い当てています。

このような外国人教師をいらいらさせる学生たちの沈黙や言葉の少なさ、もじもじした控えめな態度の原因は何か、と考えてみますと、個人的心理的なものから社会的な背景をもつものまでさまざまの要因が考えられます。いくつか例を挙げて、その背景を探ってみましょう。

第1の例。外国人の教師が、「May I open the window ?」と、英語で一人の女学生に尋ねたところ、なかなか答えを得られず、カンカンに怒ったというエピソードは、有名ですが、このような場合には、「わたしは構わないけれど、ほかの人がどう思っているか分らないので、一人では決められないわ」と心の中で考えていることが多いのです。このように、日本では、考えをすぐに言葉化しない傾向が強く、コンテクスト性が高い文化である、といわれます。別の角度から見ると、自分の意見よりも集団全体の意見を優先する習慣であるともいえます。このように、自分とパートナーの文化背景が異なり、従って対人行動様式が異なる場合には、互いに自分の立場を言葉化して説明する必要がありますが、歴史的に日本人は、そういうシチュエーションの体験が少なく、うろたえてしまうのでしょう。

第2の例。簡単な質問でも、クラス全体に対して問いが発せられたとき、誰も口を開かないことがよくありますが、その原因としては、ひとつには、集団内の相互規制力が強く、一人だけ抜け出して、異なる行動をとるのが非常に困難であることがありますが、それにも増して、学校の授業という慣習的制度のなかでは、考えることよりも、集団的規則に自分を合わせることが重要視されるということ、また、教師と生徒の役割関係が固定化されているため、生徒または学生の自由な発言は促進されず、望まれてもいないという事実にも求められます。教師が間違ったことを言っても、学生は、みんなおとなしく聞いているだけであるというようなグロテスクな状況が、

当然起こってくるわけです。このような学校の授業の場で形成された相互行為（interaction）が、そのまま大学の外国語授業の場にも持ちこまれるわけですから、コミュニケーション能力を開発しようとす教師は、それに対して十分な対策を講じなくてはなりません。

第３の例。授業の中で、想像力を使って遊べばいいような練習、たとえば「あなたが百万長者なら何をしますか」というやりとりをする場合がありますが、その際、学生は、よく、他の人と全く同じステレオタイプな文を作ったり、一つの単語のみで、短く答えたりします。このような練習は、コミュニケーション能力を養う練習ですから、multiplechoice におけるような正しい答えが求められるのでなく、たとえばパートナーとのユーモアに満ちた言葉のやりとりを楽しむこと自体に意味があるのですが、受験地獄などと呼ばれる日本の学校教育の中では、学生は、どうしても、自分の考えを自由に述べることより、カタログ的・断片的な知識を試されることに慣れきってしまうのでしょう。

第４の例。新しい単語や文章を学習する際に、学生は、辞書をひきながら日本語に翻訳することに囚われるあまり、くりかえし実際に発音して覚えるという基本的なことを、おろそかにしてしまいがちです。「３回くりかえし発音しなさい」などと、まるで子供のように指示されないと、ただニコニコとして座っているのみです。文字による意味理解のみを重視する英語教育の素晴らしい成果がここにもみられます。そしてその背景には、明治時代から形成された、人との接触を欠いた西洋文化輸入の伝統があると考えられます。

第５の例。さらに、モティベーションの問題について一言いいますと、３・４年生になって、突然、学習意欲を無くしてしまい、全く能力の伸びない学生が少なからずいますが、これは日本の社会が職種別の能力に基ずいて職を選ぶのでなく、会社という集団を選び取るので、専門職に就くことが非常に難しいこと、そして、そもそも外国語の専門職自体が非常に数が少ないことが、おおきく影響していると思われます。ですから、大抵の学生は、無意識のうちに外国語学習を、職業準備としてよりも教養として捉えているのではないでしょうか。このことも、異文化接触の増大という世界的な傾向と矛盾した関係にあります。

こう見てきますと、大学における外国語授業という活動は、決して白紙の状態で行われるのではなく、それを取り巻く様々の社会的要因によって決定されていることが分かります。このような文化的背景の異なる人と人が出会うところに起こる葛藤を分析するのが、異文化コミュニケーションの視点です。日本の学生が、外国語を学習したいのにもかかわらず沈黙しがちであると言うことは、明らかに自己矛盾ではあります。しかしそれだからといって、言葉によって分析し表現する傾向の強い文化に属する人（例えば、欧米人）が、言葉化のより少ない文化に属する人（例えば、日本人）を、一方的に議論で言い負かしたとしても、何の解決にもなりません。ますます沈黙の壁が厚くなるばかりでしょう。いかに外国人教師の方々の忍耐力が限界に近ずいていようとも、一度立ち止まって、なぜ日本の学生たちの反応がそうなるのか、理解しようと努力していただかなくてはなりません。

4

さて、異文化との接触は、常に一種の見慣れない感情を引き起こします。それには、憧れのようにポジティブなものと、嫌悪感のようにネガティブなものがありますが、それらをまとめて「違和感」と名ずけることができます。外国人とのコミュニケーションが苦手な日本の学生たちは、どうやら、外国人をまえにしたときの「違和感」にうろたえて、何を言ったらいいのか分からなくなるのでしょう。ここで簡単に、実際の授業の場で現れる「違和感」を分析してみましょう。

１．まず第１のレベルは、目の前に立った「異人」の姿です。さらにその「異人」の発する耳なれない音声です。この奇妙さを、まずは心を開いて受け入れることが肝要です。テクストの翻訳中心の外国語授業は、このレベルのみならず、以下に述べる、全てのレベルの「違和感」を組織的に排除していますので、異文化コミュニケーションの能力は、訓練できません。

２．「違和感」の第２のレベルは、奇妙に思われるその音を実際に自分の音声器官で用いて発するときに生まれます。「こんな音が自分の口からでるのか」という気持ちが、自分に跳ね返り、自己イメージを動揺させます。さらに進んで、ジェスチァーや表情、その言語独特の感嘆詞や言い回しなどを真似て用いる際にも、自己イメー

ジの変化が生じ、それに伴って、それまでのアイデンティティーの修正を迫られることになります。

3．次に、日本人だけを前にして外国語を話すとき、周囲の者達とのあいだに、第3の違和感が生じます。例えば、外国生活を体験した日本人の生徒が、正しい英語の発音で英語を話したため、クラスのなかでいじめられることがあり、そのため、ほかの生徒から排除されないために、わざと、いわゆる「ジャパニーズ・イングリッシュ」の発音をする生徒もいるほどです。その様子は、NHKの「絆」というドラマでリアルに描かれ、多くの人々にショックを与えました。その際、日本人的な発音は、日本人同志の協調原理を守っているかどうかを試す踏み絵の役目をしていると言えるでしょう。

4．第4のレベルの違和感は、外国で実際に生活するときに、習慣や考え方の違いから生まれてきます。たとえば、日本では、御馳走になった場合、その場だけでなく、次に顔を合わせたときにもう一度お礼を述べますので、日本人が外国人を食事に招待し、その後合った時に、その外国人が二度目のお礼を言わないと、会話がスムースに始まらないといったことがあるようです。笑って済ませる場合ばかりとはかぎりません。へたをすると友人関係がうまくいかなくなることだってありうるのです。

このように、異文化との接触において「違和感」は、初めの挨拶の瞬間に始まり、発音、文法、ジェスチャーなどを越えて、自己の文化と相手の文化の構造、すなわち、いわゆる「文化の文法」のレベルに至るまで、外国語学習のプロセスに必然的に伴うものであります。

5

我々は、コミュニケーションという言葉を、あたかも自明のもののごとく口にしますが、その際、人と人との間の相互行為（interaction）が、どんなに様々な複雑で巧妙な言語的手段と非言語的手段を用いて行われているかについては、まだまだ無知で、意識化したといえる段階に到達していません。自分がその中で生まれ育った母文化はあまりに当然すぎて、なかなか客観的に認識できないし、また異文化の文法は、極端に賛美したり、逆に嫌悪したりで、なかなかフェアーに判断できないものです。「異文化コミュニケーション」という新しい学問分野の意義は、そのような、文化的偏見や衝突などを意識化することにあります。異文化を知ることによって学ぶことのできるもっとも大切なことは、自分と異なる者にたいする寛容と尊敬の精神ではないでしょうか。最近、日本人は、よく漫画などで、常に集団で行動する危険な民族として描かれますが、そのような日本人にとって最も緊急の課題は、異質なものに対する寛容と画一性からの脱出です。日本の学生たちに異文化との出会いを体験させることのできる外国人教師のみなさん、現在最も緊急のやりがいのある皆さんの仕事に敬意を表して、私の話を終わりたいと思います。

溝　上：「本日はお忙しいところをお集まり頂きまして、誠に有難とうございます。この会はすでに過去4回持ちまして、いままではどちらかといいますと、LLで教えておられる先生方の、どうしたら効果的に外国語を教えることができるかといった技術的なことを中心に話してきたわけですけれども、今回は少し趣を変えまして、今世界的に問題になっております異文化コミュニケーションというものをとり上げてみたいと思います。と申しますのは、異文化コミュニケーションというのは、人間の相互行為に関する全く新しいアプローチであり、人々が相互行為を行なうやり方をみれば、その文化的アイデンティティーについて多くのことが分かるといわれております。私たち日本人は経済的には非常な自信を得たわけですけれども、まだ外国人と上手にコミュニケーションする方法を知りません。そして時々大変な失敗をおかします。そして誤解もされます。そのことと大阪外大における語学教育とは、実は密接な関わりがあるのだと思います。それで、今年は、もちろん語学教育というものと関わりを持つのですけれども、どちらかと言えば異文化コミュニケーションというテーマに重点をおいてお話し願いたいと思いま

す。それで最初にドイツ語学科の友田先生から基調報告といったかたちで、先生が日頃お考えになっておられら異文化コミュニケーションと語学教育の問題について話して頂きたいと思います。それをベースとして皆さん方に、後でお話し合いをして頂きたいと思います。それでは友田先生宜しくお願いいたします。」

友　　田：（1頁～4頁「異文化接触に関して聞かれた外国語学習」参照）

溝　　上：「有難とうございました。色々示唆の多いお話しだったと思うのですが、今の友田先生のお話しを基礎にして、これから先生方に一人ずつお伺いしたいと思います。まず、スターク先生。最初にご指名して申し訳ございませんが、先生は先日大阪外大の組合新聞に、「どうも学生は喋らない、最初喋らないのにショックを感じた。もっとも最近の学生はずいぶん変わってきている」というようなことをお書きでした。学生がおとなしいということに驚かれたと書いていらっしゃいますので、先生の方からまず最初に、今の友田先生のお話しについてどう思われたか一般的な印象をお聞かせ下さい。」

スターク：「それは私が最初来た頃の状況を表しています。それは8年前のことです。今の状況はおおいに変わっています。その問題は英語に関して言えば最近の2、3年でよくなってきています。この頃は、クラスに一人か二人の生徒は黙らせるのに困るほどです。ある点では、その問題はおおいに変わりました。ほかの言葉に関しては分かりませんが、英語に関しては良くなっております。」

溝　　上：「どうも有難とうございました。大変嬉しいことをお聞きして、これはやや意外だなあ、やはり日本も少しずつ変わっているのかなと思った次第です。次にアメリカのネルソン先生にお尋ねしますが、やはり日本人が一般的に（外大の学生だけではなく）無口であるということについてどうお考えでしょうか、ある調査によりますと、日本人の大人が平均一日に話す時間は3時間30分だと言われています。それに対してアメリカ人は6時間40分喋ると言われています。ということは、これは単に外国語だからというのではなく、もう国民性が無口な国民とお喋りの国民とはっきり分かれていると思うのですが、しかしスターク先生が最近の学生は変わったとおっしゃいました様に、もしかすれば日本人も少しは変わりつつあるのではないかと思われます。先日の東京、ワシントンを通信衛星で結んだ国際シンポジウム「ブッシュ政権スタート―日米関係はどうなる―」というテーマのシンポジウムを見ていますと、むしろ日本側の方がよく喋っていて思ったことをずばずばしかも非常に個性的なことを言っていた様に思われます。これについてネルソン先生のお考えはいかがでしょうか？」

ネルソン：「私はこの様なことについてコメントする自信はないのですが、私は二人の日本人がずっと静かにしているのを見たことがありません－もし彼らが嫌がっていなければ。もちろん、これはすべての文化にあてはまりますけれども。うるさくていつでもだれかが喋っています。もし文化的な違いを言いますと、この様に日本人がどれだけ喋ってアメリカ人がどれだけ喋るということについて私は疑います。日本人は、いつもよく喋り決して静かではありません。もう一つ言いますと、私がここの大学に来て以来学生たちは日本

語を喋る時は静かだが、英語を喋りはじめるとひじょうにうるさく喋る様になります。私のクラスはほとんど沈黙がありません。静かなのは彼らがものを読んでいる時であります。だから何も言うことはありません。私は今言われたような状況があるとは思えません。」

溝　　上：「有難とうございました。これはもちろん私のリサーチではなくある本を読んで得た知識なのですが、この調査結果が間違いであれば、それに越したことはないと思います。次に、ソ連からお越しのプロトニコヴァ先生にお伺いします。最初に日本にお越しになった時に、どういう点でコミュニケーションの不便さをお感じになったでしょうか？」

プロトニコヴァ：「何といっても一番難しかったことは、共通言語のことです。私は全く日本語を知りません。残念なことに全く英語も知りません。その反面、授業で日本の学生にロシア語を教えることに大した問題はありません。なぜかというと、私は日本に来る前にロシアで日本の文化、伝統などに関するいろんな本を読み知識を得ていたからです。日本人はあまり喋らないとか沈黙を守るとかということをあらかじめ知っていたわけですし、そういうわけで私に関してはこのような日本人の性質は特に奇異ではなかったのです。ちょっと失望したのが、多くの学生が宿題をしないということです。授業ではあまり喋らないし、宿題を出してもやって来る学生は少数で、もしかして彼らは家では全く何もしないのではないかと思います。このような学生の態度にはかなり失望しました。私の個人的な経験から言いますと、まずひとつの事が言えます。日本では先生方が学生に何か命令しないと何もしない、強制しないと何もしないということです。私にとってはとても奇妙な事ですが現状からみると学生のレベルを少しでも上げるためにはそれが必要ではないかと思います。」

溝　　上：「どうも有難とうございました。外大の学生の特殊性については、また後でお伺いしたいと思いますが、まず初めに日本人全体の国民性についてお伺いしたいと思います。今までのお三人のお話だと、我々が悲観しているほどはひどくないということを聞いて勇気づけられたわけですけれども、今度はデンマーク語のパルダン先生のご印象はいかがでしょうか？」

パルダン：「私は言われた事は本当であると思いますが、日本の大学のクラスの大きさに問題があると思います。40人も１クラスにいれば致命的なことだと思います。この様な事が大学にも持ち込まれていて、一方的な教え方というのか教師の側からばかり言葉を発して学生側からあまり言葉を発せず、ただ質問に答えるだけということに問題があると思います。もう翻訳、翻訳そればかりで自由に意見を交換しあうという事がないということが問題だと思います。とにかく、状況は大きなクラスと小さなクラスではかなり違うと思います。あまり学生が答えてくれないということに不満を覚えたことがあります。自由に会話しょうとした時に、辞書を開きはじめたりしてとても失望したことがありました。こういうことは非常な時間の無駄使いだと思います。私の同僚などはこういった状況にとても驚いていました。私はそれほど否定的な考えはもっていないのですが、私はもっと小さなクラ

スが良いと思います。もっと自由なコンタクトを持ちたいと思います。もっと心を開いて、辞書など開かずに自由に喋ってほしいと思います。ここでは多くのパーティなどが開催されていますが、だれも参加しているのを見たことがありません。私達はもっと頑張って課外活動に参加しなければならないと思います。もっと人と人の関係を築きたいと思います。先生としてではなく。」

溝　　上：「有難とうございました。英米の先生に口火を切って頂き、ヨーロッパ語の先生の発言が終わりましたので、これからアジア・アフリカの先生方におたずねしたいと思います。私はわざと日本と地理的に遠い国から順番に聞いていきたいと思っています。というのは、日本はやはりアジアの国ですから、遠い国ほど文化の違いも大きいのではないか、近づくほど違和感も減っていくのではないかという期待感があるからです。それでは、タンザニアのアマニ先生、まず日本に来られたときに、どういうときにコミュニケーションの困難さを覚えられましたか。」

アマニ：「困ったと言うより、やりにくかったですね。たとえば、新幹線で遠くへ行く時など、隣りの人に話しかけたらよいのかどうか分からない。見ず知らずの人に話しかけないことが日本では普通で、話しかけるのは失礼かもしれませんね。アフリカでは、同じバスや列車に乗ると、知らない人どうしが話し合っています。だからアフリカのバスや列車はとても騒がしい。これも文化の違いの一つでしょうか。また日本では、先輩がいると後輩は遠慮して黙ってしまうことがありますね。会話の授業でも後輩は遠慮がちです。また、活発な性格の学生がいると大人しい学生は黙りがちです。でも大人しい学生は何か考え、言いたいことはあるはずですよね。このあたりをうまくやるのが先生の役割ではないでしょうか。それに先生が威厳を保っていると、どうしても学生との間のギャップが広がってしまいます。私はできるだけ学生に溶け込むようにして、たまには教室のかわりに野外や「サテイア」で授業するなど雰囲気を変えるように努力しています。そうするとなぜか元気の出てくる学生もいますね。だから、先生とはこういうものだ、教室ではこうあるべきだとかいったことはあまり考えず、私も学生の仲間の一人になって楽しむようにしています。教室の外でのつき合いの方が、場合によっては意義深いこともあります。アフリカではこうだからというのではなくて、日本文化に根ざした人間どおしのコミュニケーションを知ったうえで、授業をすることが大切なのでしょう。」

溝　　上：「有難とうございました。」

ネルソン：「ちょっと中座させて頂きますので、一つ言いたいことがあるのですが、まずひとつの事は、ちょっとした話をいろんなところでやる、たとえば指にバンドエイドを巻いていた人がいれば『どうしたの？』とか言うそういうふうなちょっとした自然な会話が大切だと思います。それから、2年前から始めたのですが、阪大でもここでも同じなんですが、Aカードというのがいつ話してもいいというAのしるしで、歩いている時にそれを見せているということは話せるということでゲームの様なものです。もし、Jカードがついていると、それはジャパニーズという意味で、日本語を話すということで

す。だからAカードをたくさん上げるということはたくさん話せるということで、その様なゲームはとてもすばらしいことです。この様なことをすれば、100のうち50の反応が返ってくるということで、とても会話が進みやすくなるということです。もし、Aカードをその人が上げたくなければ上げなくても、それでもその人と話すということで、とてもいいと思います。どうも有難うございました。」

溝　上：「有難とうございました。先ほどのアマニ先生の電車の話、とてもおもしろかったと思います。と申しますのは、私よくインドへ行くわけなんですが、インドでは長時間乗物に乗り合わすと隣の人はかならず話しかけてきます。それは国民性―黙っておれないという―なんですね。一方、イギリス人について、これまたスタークさんに訂正していただければならないかもしれませんが、イギリス人というのは、何時間電車に隣合わせに座っていても、絶対話しかけてこない－それはイギリス人が冷淡なのではなく、その人に迷惑をかけたくないからだということがよく言われております。日本人については、私自身が大きな変化を感じております。私が20年以上前の学生の頃、東京まで行かなくても姫路くらいでも、快速電車で乗り合わせると隣の見知らぬ人と話をしたものです。私の通学列車だった福知山線のＳＬ列車では、よく田舎のおじさんと話をしたものです。新幹線が出来てから誰かに話さなくなりましたね。これは私が冷たくなったのか、あるいは迷惑をかけたくないと思っているのか私自身分かりません。忙しくて他人のことにかまっておられなくなったということは言えます。ここで先生方に質問したいのですが、もし先生方のお国の電車に、長時間日本人（たとえば私）が乗ったとして、かならず私に他の乗客が語りかけてくるであろうと思われるお国の方、手をあげて下さい。（注・中国とイランを除くアジア・アフリカ諸国の全員とソ連の先生が手を上げる。）中国ではいかがですか？仮に私が中国に旅行して５時間列車に乗っていると中国の人は私に話かけてくるでしょうか？」

アマニ：「多分被（＝中国の先生）は、日本にあまり慣れていないから、分からないのではないですか。見知らぬ人に喋るのは難しいと思います。私の経験は、日本語で日本人同士で話すことを言っています。」

溝　上：「それでは訂正いたします。皆さん方のお国の人同士が皆さん方の国で、５時間列車に乗り合わせた時に、その人達は話をしますかどうですか？話をするお国の方、手をあげて下さい。普通の場合です。ソ連の人同士が同じ列車で旅行した場合にその二人は話しをしますか？」

プロトニコヴァ：「はい、話します。」（注・イギリス人とイラン人以外全員手を上げる。）

溝　上：「有難とうございました。やはり、イギリス人が迷惑をかけたくないから話さない、というのは正しいようですね」

スターク：「英国では人々は話したい時には、何かサインを送ると思います。新聞を読んでいる時などは別ですが。これは拒否というものの表れなのでしょうか、英国の人はあまり見知らぬ人に話しかけないという習慣があると思います。私はそうだとは思いません。もっと違ったことをしていると思うです。もし興味がなかったら、本とか新聞を読んでいるということです。話したくないときにはそういう処置をとると思います。」

溝　上：「有難とうございました。この問題ばかりやっていても仕方ありませんので、今度はペルシャ語学科のラジャブザーデ先生、いまの話でただ一人東洋人で手をあげられなかったのですが、やはりイランの人と日本人はいろんな考え方でちがいがありますか？」

ラジャブザーデ：「はい、あなた方がご存じのように、アジア人というのは、お互い共に共通の大

陸の人間ですので、マナーとか行動、性格においてはたいへんよく似ています。マナーに関して言えば、私が日本に来た頃そして私が最初の授業を担当した時、眠ってしまう学生が多く、驚いた思い出があります。しかし、他の国では、学生は全く座席の位置など考えずに思い思いのところに座っていました。他の行動に関して言えば、日本人の学生の性格が非常によく表れているのが、彼らが単におとなしく恥ずかしがりやであるだけでなく、彼らが何を言って良いのか分かっていないという面があったと思います。たとえば天皇の崩御に関しても、学生は何も言うことをもっていません。彼らの誰一人として独自の考えをもっていません。彼らは全て普通の人で、一つのクラスに４人か５人の生徒だけが非常によく出来て、後は中間と、出来ない生徒がいます。クラスの下位のひとは彼らもできないと感じていて、話すのを恐がっています。ディスカッションや会話をしょうとしません。彼らが授業ではとてもよい考えをもっているのですが、ディスカッションをやれと言われたら一言も喋ることができません。実は、日本人の教師も基本的にディスカッションをやらない態度です。それらが話合わなければならない問題です。文化とか性格、習慣の遠いについて言いますと、理解できることばかりです。ときどき外国人からみるといくらか奇妙な行動もありますけれども。たとえば、日本人は日本人の前で日本人であろうとします。日本人に喋らせますといくらでも喋りますが、普通の時はあまり喋りません。」

溝　　上：「有難とうございました。教官に対する批判もいただきまして耳の痛いことですけれども、ごもっともなお話で有難うございました。それでは、パキスタンのタバッスム先生に何か一言お願いします」

タバッスム：「クラスにおいては大変やかましく、特に女生徒は男子生徒よりも非常にお喋りで、私が教えている間でも構うことなくよく喋っています。あるお喋りの女子学生に、ウルドゥー語で āp bātuni hain（おしゃべりさん）とノートに書いてやったのですが、彼女はその意味を知りません（笑）。私の国ではだれも眠ったりしません。授業中のマナーは良いです。パキスタンでは大学生は正しい座り方で座ります。先生がいる時はいつも静かにしています。先生がコメントを求めますと喋りますが、先生が喋っている時は何も言えません。日本の学生は眠ったり、コーヒーを飲んだり弁当を食べたりいつも教室で何かが起こっています。私が質問した時も、彼らから答はかえってきません。私は彼らにウルドゥー語会話を教えていますが、いつも学生達に喋るように言います。そうしないと喋りません。それは本当に問題です。他の問題としましては彼らは、はっきりと喋りません。イエス、ノーをはっきり言わないのです。もっとはっきりしてほしいですね。私た

ちの国では学生は教師に対しとても批判的です。教師はいつも生徒から批判を聞いています。私は文学を教えていたのですが、詩とか短編小説とか、彼ら学生はいつも批判していました。批判しないことは日本国民の特徴的なことだと思います。彼らは学校などで批判することは良い事ではないと教えられています。わたしの国と大きく違う点です。」

溝　上：「有難とうございました。パキスタンの大学では、学生が教室の中での作法がよくて決して無駄口は聞かないという事をおしゃいましたが、それは語学の授業でもそうですか？たとえば、ドイツ語やフランス語や英語の会話の授業でもおとなしいのですか？」

タバッスム：「フランス語のクラスも英語のクラスもいつも同じマナーです。経済や歴史の授業でも同じです。それは私たちの文化の一つです。彼らはとても批判的です、ものすごく批判的です。質問があればはっきりと勇気をもって質問します。学生が質問すると教師は学生が問題をよく理解していることが分かるのです。問題を理解し、より多く知ろうとします。しかし、ここではだれも質問しません。神経質で喋らない、何か心理面に問題があるのではないかと思います。別の問題をあげたいと思います。英語科では英語で英語を教えますが、たとえばスペイン語学科ではスペイン語でスペイン語を教えないのは何故でしょうか。最初の2年間はそれでいいのですが、後の2年間はその言語で教えた方が良いと思うのですが。我々の会話の授業では文化については話しません。」

溝　上：「有難とうございました。今、タバッスム先生から日本人の語学教師がなぜ専攻の言語を使って授業をしないのか？というもっともな、耳の痛いご質問を頂いたのですが、私もかつてやったことはあるのですが、友田先生がおっしゃいましたように、何か日本人同士が外国語で話すーしかも日本でですよ、仮にこれが外国だったらまた雰囲気も変わってくると思うのですがーのは「フィーリング・オブ・ストレンジネス」違和感があるんですね。これがインドやパキスタンだったらそんな違和感はだれも感じないと思うのですが、これは将来我々が克服しなければならない問題だと思っております。最初私は、一人ずつ日本人観についてお聞きして、それから外大の学生について聞こうと思っていたのですが、時間がありませんので、これからマーラヴィヤ先生以降の方については、外大の学生についての問題も同時に述べて頂ければ結構と思います。それでは、インドのマーラヴィーヤ先生、お願いします。」

マーラヴィーヤ：「私は英語ができませんのでヒンディー語で話させて下さい。議長の溝上先生に通訳をお願いいたします。友田先生がおしゃった2番と3番と4番には同意しかねます。時間がありませんので詳しく申しあげられません。また別の機会に話したいと思います。友田先生の話では、教師の役割ということについて触れられておりません。私の意見によれば、文化とかコミニュケーションとかは大した問題ではなくて、90%までは教師の責任であると思います。大阪外国語大学は外国語大学とはいえ依然として文法、翻訳、発音の練習に重点がおかれております。これは小学校、中学校、高校以来の語学教育の延長上にあるだけのことでありまして、なんら大学らしいことのように思えません。極端に言いますと、本学は大学ではなく高等学校であります。ですから私が提案申し上げたいことは、やはり今までの伝統的な教育方針を改めない限り、進歩はなかろうと思います。ここに中国やソ連から先生がお見えなので、その先生からの口からお聞きしたいのですが、中国やソ連で、たとえばペルシャ語やヒンディー語が教えられる場合に、そのペルシャ語やヒンディー語がロシア語や中

国語を媒介として教えられているのでしょうか？ソ連と中国の先生からご返事を待つまでもなく、私は確信を持って、それはかならずペルシャ語やヒンディー語で教えられているにちがいないと申しあげることができます。私はインドで高等学校以来ずっと英語を学んだのですが、それはインドの先生から英語を媒介として学んでまいりました。決してヒンディー語を媒介として学んできたわけではありません。日本では明治時代からずっと英語を教えてきたわけですが、今だに21世紀近くになっても、我々を見て「外人」というような状態でありまして、英語教育もさほど進歩していないと思います。そしてこの状態を続ける限り、依然として、英語教育の水準は上がらないと思います。この語学教育の実が上がらないということの理由について、我々は真剣に考えなければならないと思います。どうも失礼しました。」

溝　　上：「マーラヴィーヤ先生のご指摘の中で、教師の役割を述べていないのではないかとおしゃいました点につきまして、議長として説明申し上げますと、昨年までは、やはり教える側からの問題だけを取り上げていたんですね。今年は「異文化接触に対して開かれた外国語学習」、つまりランゲージ・ティーチングになると、逆に教師の役割ばかりが問題になって学ぶ側の主体性といったことがあまり問われないんですね。だから今年は、学ぶ側の視点から、ランゲージ・ティーチングではなく、ランゲージ・ラーニングといった、こういうテーマにしたわけで、教師の役割が余り述べられていないというのは、今回はある意味で正しい事なのです。それでは、今度はインドネシアにまいります。アイプ先生、お願いします。」

アイプ：「どうも有難とうございます。司会者は英語科の先生にまず発言を求め、ついでロシア語科の先生、そしてデンマーク語科の先生という順番にきいていかれましたが、このことは、いみじくも日本の文化的背景をよく表していると思います。なぜ、この着席順に発言しないのでしょう。ただ、ちょっとだけそう思っただけなんですが。私もロシア語の先生と同じ様な体験を持っています。ほとんどの学生は、ただクラスの中だけで勉強しています。家では勉強しないようです。また中には私の家にインドネシアの料理について教わりに来る学生もいます。生徒たちが教師の家に来るということはとても良いことだと思います。他の語科ではどうなんでしょうね？インドネシア語科ではインドネシア語を教える目的は何かという事を考えますと、インドネシア語をマスターする事が目的なんでしょうか、インドネシア語を上手に喋るという事が目的なんでしょうかそれが第一の問題だと思います。」

溝　　上：「どうも有難とうございました。なぜ着席順に指名しないのかとご指摘がありましたが、これは決して西洋崇拝という意味ではございません。最初に私が申し上げました様に、たまたまイギリスのスターク先生が、外大の組合新聞にそのような事を書いておられましたので、話はそれから進行させた方が都合良いと思ってお聞きしたわけです。それと、もう一つ、遠い国の順にお聞きしております。大阪外国語大学は普通中国語から始まり、最後に西洋語が来くることになっているの

ですが、今日は、遠い順番からやって日本に近づくほどインター・カルチュラル・コミュニケーションのギャップが少なくなるのではなかろうかということを期待していたわけですが、思いがけない成果がございました。こちらに近づくほど我々への批判が厳しくなってまいりました。非常に良かったと思っています。それでは同じ学科のユー先生、お願いします。」

ユ　　ー：「とても限られた経験から話すのですが、私が見た限りにおいては学生について一番問題なのは、一年生についてなんですが、とても恥ずかしがりやです。そして言語の問題ですが、私はフィリピン語を教えています。しかし、2年生になるとフィリピンの文化などについてフィリピン語で教えています。だから2年生以降になるとあまり問題はないのです。そして、学生が皆受身だと皆さんもおしゃいましたが、学生がいろんな事について話し合うことは私の国ではよくあることです。学生に初めにオリエンテーションをやることはとても良いことだと思います。私の教え方はそのように一方的ではなくて一緒に授業をやっていくというものですが、やはり私が話すことが多いようです。私は日本語も勉強しているのですが、わかる言葉もあればわからない言葉もありますが、とにかく日本語で日本語を学んでいます。2・3・4年生に関しての一番の問題は、学生が本を読む態度です。文学に関しては、ただ読んで話しあえば良いのでとてもゆっくりゆっくりと読むので、量が足りないということです。たとえば、4年生では小説を読むように言います。絵本のようなものを宿題に出す先生もいますが、私はそういうものは出しません。大学レベルにおいてだけではなく、高校レベルにおいてもそうなんですが、たくさん読むと言うことが大切だと思います。難しいと言いますが、どんどん読んでいくことが大切だと思います。外大で教えるには、とても時間がかかります。色々な授業の準備があるからです。もう一つ言えることは言語を初めに学んでその後に文化やその国について学ぶということです。3・4年生は夏休みの間に2～3週間フィリピンに行きます。それは言葉の勉強にもなりますし、そして彼らが帰国してからは、とても勉強に興味をもてるようになっているということです。もう一つ私がおこなっていることは、ランチを学生と一緒にとるということです。昼休みに学生が－4年生が多いのですが－私の部屋に来て一緒に昼食をとります。そして、会話を気楽に交わすことができます。それはとてもいいことだと思います。言語を学ぶと同時に私たちのコミュニケーションもはかっていけると思います。」

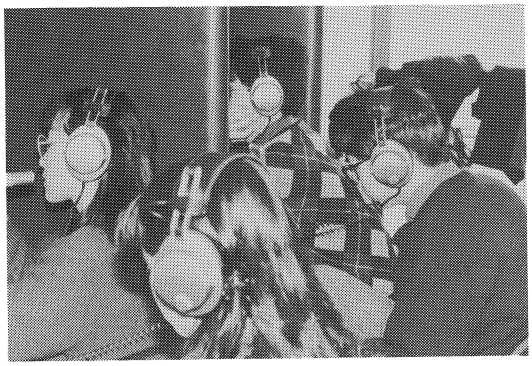
溝　　上：「どうも有難とうございました。それでは、中国の先生お待たせいたしました。やはり文化の事をお聞きしたいと思うのですが、中国と朝鮮と日本は文化的には儒教圏で、たとえば目上の人を尊敬するとか、あまりお喋りなのはいけないとかいう共通の文化をもっていると思います。もちろん違いもあります。たとえば、中国の非常に優秀な学生がアメリカの図書館の司書の筆記試験には非常に優秀な成績で合格したのに、面接試験で落ちたという話がございます。なぜ落ちたかと言いますと、その学生はあまり話さなかった、それは東洋の美徳から故意に話さなかったわけであります。白人の試験官にはその学生が非常に消極的で能力がないと写ったわけですね。こういう問題は日本人とヨーロッパ人の間にもよくある問題ですので、やや日本の文化と共有する文化をお持ちの中国の方から是非お尋ねしたいと思います。もちろん違いもございましょうが。また、勉強の意欲はどうでしょうか？」

趙　　：「日本の学生が話をしたがらないということですが、これは絶対的なことではな

いと思います。たとえば、個人的に私を訪ねて来る学生がたくさんいますが、彼らは私とお喋りするのが好きです。高学年生だけでなくて一年生でもお喋りを楽しむ学生がいます。そして、今こんなふうにお喋りをしているのに、なぜ教室では喋らないのかと尋ねますと、『教室では非常に人が多いので、自分一人で喋ることが非常に恥ずかしいと感じます』との答がありました。実際、教室では学生に質問をしてもあまり答は、返ってきませんし、たとえ答があっても非常に簡単で短いものでしかないことがしばしばあります。そこで私は、たとえばこの様にしております。8つのクラスを受け持っておりますけれども、その諸君の名前をできるだけ多く覚えてしまうようにしています。授業をするときには、教室の中を前後左右と歩きまわりまして、一人一人の学生に呼びかけながら質問を発するようにしています。その場合、学生の答が非常に簡単すぎる場合もあるのですが、次の学生に同じ質問をしますと、二番目以降の学生は全く同じ簡単な答をするわけにもいかず、だんだん複雑にだんだん詳しく、良い答になっていくということもあります。初めこういうふうな方法をとった時には、学生達も慣れないようでしたが、三か月くらいになる頃にはこの方法に慣れまして学生たちもよく発言するようになります。そういう経験からしましても、友田先生が先ほどして下さった報告に賛成の点がありまして、初めはやはりお互いの異文化をもった人間の間のコミュニケーションですから、そういう障害を取り除いて教学をやるという方法が非常に有効だと思います。」

溝　上：「先ほどマーラヴィーヤ先生がおたづねになっておられましたが、たとえば北京大学あるいは外国語学院で東洋の言語を教える際に、中国語を媒介として教えるのですが、それともいきなりダイレクト・メソッドでその言語を使って教えるのですか？」

趙　：「その問題については、ほとんどの学校でこういう状況であると思います。まず第一学年の特に前半年には母語で行いますが、後半年になりますとだんだん母語の比率が少なくなりまして、2年以後はその専攻語を使って教えるようになります。」



溝　上：「有難とうございました。金先生、大変ながらくお待たせいたしました。最後になってしまいまして申し訳ございません。いかがでしょうか一番文化的にも近い国とはいえ、やはり教えておられて色々問題があると思いますので、それをひっくるめてお話ください。」

金　：「多くの先生方がおっしゃったことと重複するかも知れませんが、障害を取り除いて授業を始めた方がいいと思うのですが、その障害を取り除く方法は、お互いの異なる文化をきちんと理解することだと思います。先生と学生の間も親しくなって、安心して学生が自分の意見を話せるように、先生も学生に安心感を与えなくてはいけないし、そしてクラスごとに全部違いますので先生もそれらの違いを早く把握し、いつも同じクラスだと思ってはいけないと思います。」

溝　上：「それから文化のことをお尋ねしたいのですが、やはり韓国の人と僕達日本人は何かにつけ似ていますけれども、違いもあって、たとえば韓国の方は喜怒哀楽を日本人よりもっとストレートに表現しま

すね。日本人の方は喜怒哀楽を余り表さないと言われているのですが、それについてはいかがですか？」

金　：「それはおっしゃるとおりだと思います。やはり、顔も似ていますし近いからといって何でも同じだと思うことが、非常にいけないないことだと思います。ですから、韓国と日本が近くなりまして、学生の半分以上が韓国を訪れますが、それは授業には大変プラスになっていると思います。私も教えやすくなりました。」

溝　上：「有難とうございました。本当はこの後、将来こうすればいいという皆様方の提案を聞いてお開きにしょうと思っていたのですが、大変多くの方にご出席を頂きましたので時間が足りなくなってしまいました。誠に申し分けございません。司会者の不手際のため、議論が中途半端になってしまった点をお詫びしたいと思います。しかし、いろんな先生方のお話を聞いておりまして、共通点はやはりあったと思います。多くの先生方がおっしゃいましたように、日本の学生は喋るけれども、当てられた時には喋らないとか、その態度が受身的で積極性がない、喋る内容も貧弱である。教師に対して批判をしない、スターク先生のお言葉を借りますと教師は教師、学生は学生で、その間に気安さがない、役割が固定化されてしまって教師と学生の間に交流がないという点と、もう一つはなぜ専攻の語学を使って日本人が教えないのかとこの二つを多くの先生方からご提案頂いたと思います。同時に、友田先生のお話しにもありましたように日本の又、外大の学生が何故、外国人の先生方の期待に反した反応をするのかは、その理由があるはずですのでそれを理解しょうと努力して下さることを先生方にお願いしたく思います。これを結論として本日の会をこれでお開きにさせていただきます。どうも有難とうございました。」

私説『視覚映像文化論』

（その４：Alcyoneと映画『野蛮人のように』とイエス・キリスト生誕と）

ポルトガル・ブラジル語学科　林　田　雅　至

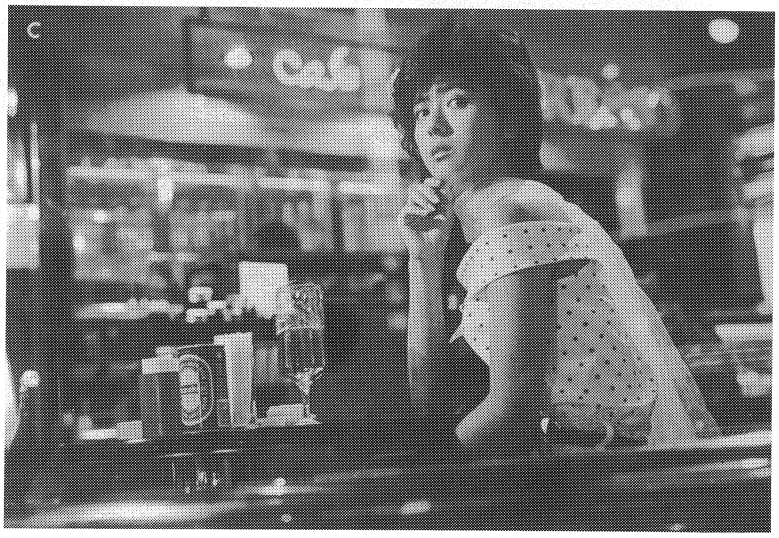
●日記のページを繰りながら、Alcyoneに初めて会ったのは３年前の11月下旬だったのかと思う、僕は。某財団法人に勤務する友人Ｉさんの紹介だった。東京・虎ノ門にある北欧風造りのCafé――僕はここがとても好きで、その頃暇を見つけては立ち寄ってRoyal CopenhagenやWedgwoodの均斉のとれたデミタスカップで出されるとても香ばしいexpressoを飲みながら、その店の経営者Ｔさんがふっかける文学議論・映画批評に興味深く耳を傾けていた――で、caféのカップを口元に運びながら、パターン通りの初対面の挨拶を互いに交わした●一見するとboyishな印象だけれど、金髪を短く刈り込んだ、目の覚めるような素敵な青い瞳を持った24歳のeconomistは無邪気で、そのintelligenceをすっかり覆ってしまうほどに魅力的だ。イタリア・スペイン系のブラジル人。フィアンセはブラジルに住むスペイン人眼科医。３月に帰って、落ち着いたら……と、彼女が言いかけたところで、Ｉさんはまだ仕事が残っていますから、と席を立った。Triangleなその場の関係が少し揺らいだけれども、彼女が12月には結婚しようと考えています、と言葉を結んでくれたので、動揺は直におさまった。最初の出会いはこんな風だった。それから彼女がeconomistの養成コースを終えて日本を去った３月末まで何度となく会っては、

友人のpartyに出かけてみたり、美術館で陶器や浮世絵を心行くまでながめてみたりした●彼女にAlcyoneの語源にまつわる話をしたのは、友人を沢山呼んで12月25日Christmas partyを僕の家で賑やかに催したのだけれど、その場でだったと思う。ギリシャ神話に由来することは知っているわと言う、彼女は。その先があるんだ。ギリシャ語風にはアルキュオネー。夫ケーユクスとの幸福な家庭を鼻にかけ、ゼウスとヘーラーと同じくらいに幸福と自惚れたために、神々の怒りをかって女はかわせみ（alcyone ou alcíone）に、夫はわび鳥に変えられてしまう(transformar)。海岸に彼女の作る巣が波にさらわれるのを見てゼウスは憐れみ、ヨーロッパの古暦で12月25日にあたる冬至（solstício de inverno）の前後各々7日間、alcyoneが卵を産む間凪ぎにした。それでこの《アルキュオネーの日》の間には嵐がないという●ここまで話すと、当のAlcyoneは微笑を浮かべてなにか言いたそうだったけれど、僕が話を続けようとしたので、その日特別に用意していたcaipirina（alcohol度40%前後のブラジルの火酒pingaをレモン汁で割って砂糖を加えたcocktail）がもう一杯欲しいわというしぐさを僕の友人に黙って示した。冬至は天文学的に見てもとても大事なポイント、新しい太陽の誕生の点。まだ先は長いが、来たるべき春の誕生の意味も込められている。言ってみれば《死と再生》の転回点。alcyoneの出産にまつわるepisodeはこのcontextのなかで捉えておかなければ……。もちろん《世の光(lux mundi)》としてのキリスト神を祝う日が25日だということは、偶然の一致ではないよ。Alcyoneがすっかり感心したように見えるのは、僕の話のせいなのか、それともさっきから見ているだけでももう5・6杯になるcaipirinaのcocktailのせいなのか、どうもambiguous. ●まだ先はある。ローマの古い農耕神Saturnusを祝うSaturnalia祭は12月17日から1週間続き、その間は正にカーニヴァル的雰囲気が溢れる。日常世界が転倒し、奴隷はその主人をあざけり罵っても構わず、主人たちと同じように酒に酔うことも許され、彼らと同じ食卓についても構わず、さらに日常世界なら笞刑・投獄または死刑の罰すら十二分に受け得る行動に対してすら、一言の叱責を受けることもなかった。この期間サイコロや籤で選出された奴隷の《偽王(モック・キング)》は絶大な権力を揮う。しかしその栄華も束の間。祭の最終日、彼は旧年の生贄として殺害されてしまう。そして共同体は新年を迎えることになるのである。この祭はChristmasの起源になったとも言われている*。●面白いかい、と彼女に言おうとしたら、当の本人は満面に笑みを浮かべて……Muito obrigada pelo estudo. Gostei muito.（調べてくれたのね，うれしい。気に入ったわよ）と耳元で囁いていた。私は冬至を中心に私の出産を考えなくてはいけないのね、とあまりに真顔で言うものだから、僕は少しおかしくなって、でも話し過ぎて喉が乾いてしまっていたから、笑わずに、Alcyoneと呼びかけて僕にもcapirinaをもう1杯くれるかい、と今度は僕が耳元で囁く番だった●……話し相手をY子さんに変えた。彼女はこの4月から美術大に通い一生懸命染色・織物技術を研究している。どう見てもボリビア人にしか見えない19歳。当時はまだ受

マギ(賢者)の礼拝

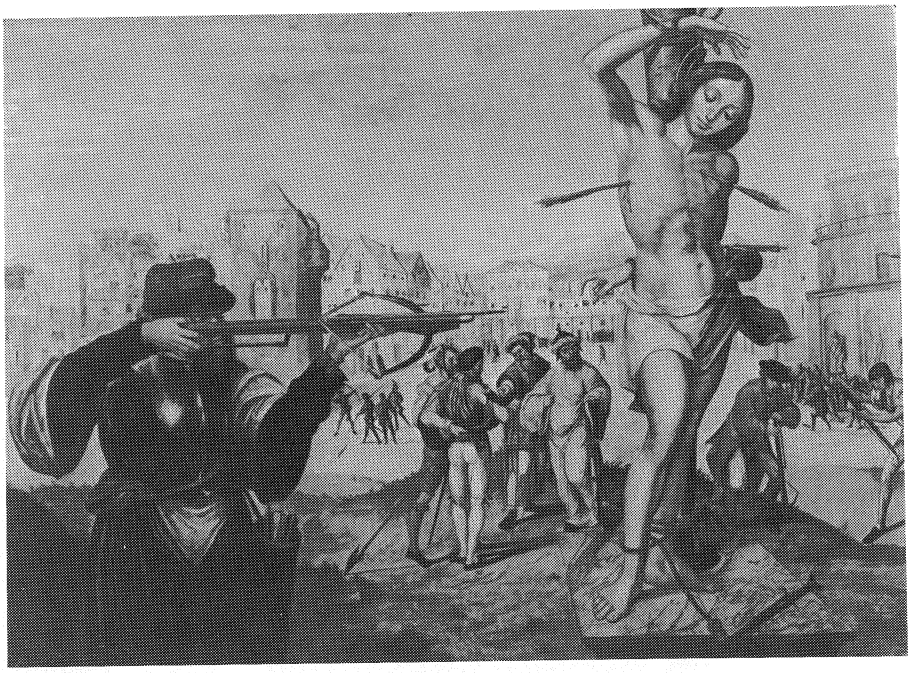
地方都市Viseuを中心に活動しViseu学派を形成した工房の親方・巨匠Vasco Fernandesの作(c. 1503-1505)。Viseu大聖堂14枚のパネル画からなる中央祭壇画の1枚。画面中央に配されるBaltasar王の姿は大航海時代の影響を反映して当時まだ発見間もないBrasilのインディオそのものである。

験生。秋に公開された川島透監督・脚本作品『野蛮人のように』を見たかどうかを彼女に尋ねてみた。彼女はnãoと答えたので、粗筋をざっと話し終えたところで、こんな風に言葉を結んでみた。このドラマは、暴力団の権力闘争に巻き込まれた薬師丸ひろ子演じる有栖川珠子と柴田恭兵の中井英二が2人で力を合わせて、降りかかる火の粉を払い、対立する当面の敵さえも身の危険を冒しつつ倒してしまうスリリングなサスペンス劇に留まらないんだよ。有栖川珠子の精神的な側面の《死と再生》のドラマになっているところがなかなかしゃれている。それはどういうこと、とY子さんは説明を求めてくる●15歳の若さで彗星のように文壇にデビューし、《天才》の名を欲しいままにしてきた小説家・有栖川珠子は20歳を迎えようとしている現在、何もかもを知りつくしてしまったような倦怠感の中で、執筆活動に身が入らず憂鬱に打ち沈んでいる。気のおけない仲間たちの訪問と真夏の海辺での花火大会は彼女には程よい憂晴らしになった。映像から海辺の夜空を焦がす花火は、珠子のコテージを幻想の世界に引き込んでいくように思える。この段階では珠子自身すらもまだ気付いていないが、実は既に彼女は今置かれている鈍重で淀んだ日常世界からスリップして、幻想の別世界へトリップしようとしているのである●微(ほろ)酔い気分で車を飛ばし夜の都会・賑う六本木に繰り出していく。街を練り歩く珠子に突然ぶつかってきた1人の男。外人娼婦の用心棒・やくざの世界の漂流者・中井英二はつい数時間前に兄貴と慕う滝口（清水紘治）に頼まれて山西組々長が殺された現場から拳銃の入ったバッグを預り、それをコインロッカーに隠してきたばかりだった。そんな男を相手に謝罪するように執拗に猛然と抗議する彼女は、開き直った投げやりな英二の態度に不思議に引きつけられるものを感じる。一方英二は彼女の物怖じしない、男勝りな意気のよさに生意気なと反発感を抱くと同時に好感をさえ持ってしまう●異質な人間どうしの衝突からストーリーは展開していく。思いもかけず2人に黒ずくめの服を着た追手が迫りくる。映画の後半部で珠子は小説家らしく推理力を働かせ、巻き込まれた事件の全貌を紙の上で解き明かして英二を驚嘆させるが、この時点ではなぜ追われなければならないのか想像すらできない状態である。山西組々長を殺害してその地位への上昇を謀った滝口は自分に向けられた組長殺しへの疑惑をそらそうと、組長が殺害される前最後に会っていたのは1人の女だと告白し、そこまでは確かに事実に即していたものの、その女の人相・いでたちをでっち上げてしまう。もちろん偶然のことではあるが、しかし珠子にとって非常に具合の悪いことにその人相・いでたちが珠子にそっくりだったのである。実際追われる理由はここにあった。追跡され始めると同時に珠子が幻想の非日常世界に入ってしまったことは、映像が証明してくれる。『不思議の国のアリス』に登場しそうなラビットたちが六本木のcaféで遊ぶ。現実に存在しない麻布線・西麻布駅のプラットホームに追い詰められ、駅に接近する電車に身を投げる珠子。車両とプラットホー



映画『野蛮人のように』(1985)から

ムのごく僅かなスペースに身を潜ませて九死に一生を得たのだ。このあたりも日常世界から見れば全く《在り得ぬこと》である●追手のナイフに負傷した英二を車に乗せて珠子は逃走する。海辺のコテージで傷の手当てをする珠子。その甲斐あってか英二は回復する。映画のラスト・シーン——滝口が部下を連れてやって来る●夜明けとともに滝口らがコテージに侵入しようとドアのノブを回すと仕掛けが働いて彼らは驚いて反射的に銃を放つ。予め部屋の内部にはガスが充満させてあるので、銃の火が引火して彼らともどもコテージは爆発し火の海に包まれる。捨て身の英二と珠子はこういうトリックを仕組んだ。滝口らはまんまと罠にはまる。2人は地下室に身を潜め助かる●珠子はこの日8月31日20歳の誕生日を迎えた。捨て子の英二には誕生日などないが、大きな危機を切り抜けた今彼は自分の誕生日を今日にすると珠子に言う。彼女も納得する。英二は滝口らとの戦いのさなか再び負傷したその体を珠子に支えられ、2人は寄り添うように燃え盛るコテージをバックに海辺を画面手前の方に歩いて来る。そしてそこで映画はエンディングとなっている●珠子はコテージとともに過去の一切の自分を葬り去って誕生日を境に生まれ変わったのだ。事件の導入部・海辺の花火大会からその顚末までの非日常的雰囲気は丁度Saturnalia祭そのものである。この間が7日間だったらもっと良かったんだけれど、8月26日にスタートしているから残念ながら1日足りない。ともかく彼女の精神の領域の《死と再生》のドラマさ。分かったかいY子さん。彼女はすっかり感心した様子で今度その映画観てみたいわと可愛く笑ってみせた●3年前のChristmasはこんな風だった●1988.12.25 Jesus Cristo 生誕日に記す●



聖セバスティアヌスの殉教

16世紀前半ネーデルランド・フランドル学派の強い影響を受けて確立した，国王D.Manuelにちなんで命名されたマヌエル様式期絵画・Lisboa学派の頭領・宮廷画家Jorge Afonsonが開設する工房で働いていた画家の中で最も重要視されて然るべき画家Gregorio Lopes(　　～1550)の作。この絵はトマール(キリスト修道院)の壁龕(へきがん)のために描かれたもので現在Lisboa国立古代・古典芸術博物館に保管されている。因にGregório Lopesは1514年以前Jorge Afonsonの娘と結婚しており，彼も巨匠同様宮廷画家の要職に任じられている。

〔注〕

＊当時僕はEuropeのcarnival《偽王(Mock King) 載冠・王位剝奪》の儀式とSaturnalia祭を混同していたようだ。ここにできる限り正確に、Saturnalia祭について叙述しておこう。祭りはローマ暦年の最後の月である12月にあたり、種まきと農耕の神Saturnusの幸福な治世を記念するためのものだと一般的には考えられていた。Saturnusはイタリアの仁慈の王として太古この地上に住んでいた者で、無知で四方に散らばっていた民を山の上に引き上げて一緒に集め、彼らに農耕の術を教え、律法を与え、平和の内に統治したのである。彼の治世は《黄金時代》といわれた。大地は豊かに実り、幸福な世を煩わす戦いの音も不和もなかった。邪悪な物欲が勤勉で満ちたりた農民の血の中に毒を注入するようなこともなかった。奴隷も財産の私有も共に知られることはなく、万人がすべての物を共有していた。ところがこの善き神・仁慈の王は突如として消え去ったのである。しかし彼の記憶は後々の世までも人々の心の裡にあって彼を偲ぶために数々の神殿が建立され、イタリアの多くの丘や高所には彼の名が付けられるようになった。ところが彼の治世の輝かしい伝説には、ある暗い影がさしていた。彼の祭壇は生贄の人間の血で血塗られていたといわれ、後代になってからはその代わりに人形が用いられた。パリ図書館所蔵のギリシャ語原稿の中からガンのフランツ・キューモン教授によって発見・出版された『聖ダキウスの殉教物語』の中にマクシミアヌス、ディオクレティアヌスの治世にダニューブ地方に駐屯していたローマ兵がSaturnalia祭を祝った模様についての伝説がある。それによると毎年祭りの30日前にローマ兵らは仲間のうちから若くて美しい者を一人籤で選び出し、Saturnusに似せて王位を纏(まと)わせた。そのような装いで兵隊に付き添われて公式に出歩き、どんなに下品でハレンチなことであっても、情熱に身を任せあらゆる歓楽を欲しいままに味わうことを許された。しかし彼の支配は短く、悲劇的な結末が彼を待っていたのである。30日の期間が終ってSaturnalia祭が来ると、彼は自ら扮する神の祭壇に立ってわれとわが喉を切って果てたのである。祭り開催中の地位転倒に関する記述は誤っていないが、偽王は自由人たちがサイコロで決めたのであり生贄の犠牲になることはなかった。Saturnusに扮する者が生贄として死ぬことによって旧年は終り、旧年と新年の狭間にある非日常的な放逸の祭りを経て人々は再生したSaturnus神とともに新年を迎えるのである。ところで神話及び象徴に内在する窮極的論理＝《死と再生》の論理（犠牲の論理）に裏打ちされた文化的事例として《ペスト除けの聖セバスティアヌス崇拝》に注目しておこう。ディオクレティアヌス、マクシミアヌス両皇帝支配下のローマ帝国でキリスト教徒は暗黒・迫害の時代を生き抜いている。3世紀末聖人はミラノ市民権を有し、キリスト教に帰衣していることを隠して生活しているが、両皇帝から望外の厚遇を受け、第一歩兵隊の指揮権を獲得している。ところが信者であることが発覚し、大量の矢をもって射殺される不幸な運命をたどることになる。伝説に従うと象徴的にペストを意味する矢を受けても聖人はキリスト信女の介抱によって救済される。本来中世に確立した《生の理想としての聖人の高き観念であった》聖人崇拝が14世紀中世末期・黒死病の流行によってきわめて民間信仰の臭いのする、いわば宗教の疾病保険とでも言えそうなanimism的護符という形式で人口に膾炙していくプロセスは興味深い。日本において本地垂迹説をもって地蔵菩薩が春日明神の本地として、やがて塞神(さいのかみ)を嚆矢とする道祖神と結び付き、地獄における救済だけでなく、戦場・病気、その他困った時など現世における苦悩を救済する、民衆にとって親しみ深い世俗的な《ほとけ》としての役割を演ずるに至る類比的な文化の平行現象を思い出さずにはいられないのである。

映像資料(レーザー・ディスク)所蔵一覧

その4　　(1989年2月現在)

資料名	音声	所要時間	分類
The verdict（評決）	(英　語)	2′09″	E－0305
A passage to India（インドへの道）	(　〃　)	1′37″	E－0308

資料名	音声	所要時間	分類
One flew over the cuckoo's nest（カッコーの巣の上で）	（英語）	3′00″	E－0309
Metropolis（メトロポリス）	（〃）	1′23″	E－0310
North by Northwest（北北西に進路を取れ）	（〃）	2′17″	E－0311
Torn curtain（引き裂かれたカーテン）	（〃）	2′08″	E－0312
South pacific（南太平洋）	（〃）	2′37″	E－0313
Giant（ジャイアンツ）	（〃）	3′21″	E－0314
Missing（ミッシング）	（〃）	2′02″	E－0315
Murphy's war（マーフィの戦い）	（〃）	1′42″	E－0316
Frankenstein（フランケンシュタイン）	（〃）	1′10″	E－0317
Mondo Cane（ヤコペッティの世界残酷物語）	（〃）	1′31″	E－0318
Monty Python（モンティ・パイソン1-8）	（〃）	etc	E－0319
The sailor who tell from grace with the sea（午後の曳航）	（〃）	1′45″	E－0320
Wait until dark（暗くなるまで待って）	（〃）	1′48″	E－0332
The last emperor（ラスト・エンペラー）	（〃）	2′43″	E－0333
L' Annee derniere a Marienbad（去年マリエンバードで）	（フランス語）	1′34″	F－0057
Rue cases negres（マルチニックの少年）	（〃）	1′46″	F－0060
Le Quai des brumes（霧の波止場）	（〃）	1′31″	F－0067
Les Egouts du paradis（堀った奪った逃げた）	（〃）	1′51″	F－0068
Le Salaire de la peur（恐怖の報酬）	（〃）	2′29″	F－0069
Alphaville（アルファヴィル）	（〃）	1′40″	F－0070
2 ou 3 choses que je sais d'elle（彼女について私が知っている二，三の事柄）	（〃）	1′27″	F－0071
Masculin feminin（男性・女性）	（〃）	1′43″	F－0077
Picasso（20世紀の巨匠 ピカソ）	（〃）	1′25″	F－0078
Diva（ディーバ）	（〃）	1′58″	F－0081
L' Adolescente（ジャンヌ・モローの思春期）	（〃）	1′34″	F－0082
A bout de souffle（勝手にしやがれ）	（〃）	1′30″	F－0084
Pierrot le fou（気狂いピエロ）	（〃）	1′50″	F－0085
L' Argent（ラルジャン）	（〃）	1′25″	F－0086
Melodie en sous-sol（地下室のメロディー）	（〃）	2′01″	F－0092

編集後記

◇ Audio Visual Journal第16号をお届けします。毎年、LL恒例の行事となっている外国人教師による座談会は、5年目を迎かえ、今回は、「異文化間コミュニケーションと外国語学習」というテーマとした。ドイツ語学科の友田教官の報告に基づいて活発な討論がなされた。今号はその座談会の特集号です。

◇ 「コミュニケーション研究教育センター」構想も含めて、多くの方々の寄稿・ご意見をお寄せ下さい。

AV Journal —第16号—

1989年3月27日発行

編集　大阪外国語大学視聴覚教室委員会
　　附属図書館視聴覚資料係
発行　大阪外国語大学
印刷　㈱ムラタ印刷